

# 共創先導プロジェクト(共創促進研究) コミュニケーション共生科学の創成 意見書(令和5年度)

アドバイザーボード委員

柏岡 秀紀

## (1) プロジェクトの特徴的な取組・特筆すべき成果

当該プロジェクトでは、すべての特性を持つ人たちが同等に参加できる「コミュニケーション共生」のための新しい研究分野を確立することを目指し、4つの研究班を構成し、プロジェクト全体に対して、プロジェクト協力者と言う立場で外部からの参画者を募り、各研究班個別で議論する場を設けるのではなく、全体を意識しながら議論する場として、定例会を実施している。

令和4年度においては、ロードマップに計画されている**特別展の開催**として、民族学博物館において特別展示「Homō loquēns 「しゃべるヒト」～ことばの不思議を科学する～」(2022年9月1日から11月23日まで)を開催し、一辺倒の言語学をなぞらえた展示をするのではなく、当該プロジェクトの目指す、多様な特性のヒトが持っている言語を体験できる展示を実現していた。この展示は、新たな研究分野を確立するための裾野となる多種多様な人々への門戸を開くものであり、研究者として、今後確立されてゆく当該研究分野を支える人材を培うよい機会となっている。展示自体も好評であり、展示内容を強化しつつ、インターネット上での再現、新たな展開を目指している。

また、**国際手話言語学会 (TISLR14)**を9月26日から10月1日にかけて民族学博物館講堂にて、オンライン・オンサイトのハイブリッドで開催した。ポスター発表は、オンライン(OVICEを活用)で行われ、COVIDによる収容人数が限られる中で、多数の研究者等が参加できるよう工夫がなされていた。手話を通じた研究分野であり、一つの特性に特化しているコミュニケーションに関する研究であるが、当該プロジェクトが対象とすべき大きな領域である。

以上の取組は、学術的に高い成果であり、着実な研究成果の発信がなされ、当該プロジェクトの目標達成に必要な研究者コミュニティーを構築する第一歩となっている。特別展示「しゃべるヒト」の取組は、報道でも多く取り上げられ、秋篠宮皇嗣妃殿下もご覧になり報道されました。研究者だけでなく、コミュニケーションに課題を有する様々な特性を持つ人々への社会的におおきなインパクトを与えている。

## (2) プロジェクトの自己点検結果及び課題等

令和4年の活動は、特別展・国際会議の開催それ自体が大きな研究成果でもあり、コミュニケーションに対して多様な特性を持つ人々の間に生じる課題を対象とする研究分野の存在を広く社会に知らしめることができたと考える。一方で、大きなイベントを手がけることにより時間に追われ、研究班が個別にテーマとして捉えている基礎的な研究の進捗に関する議論への時間が少なくなってしまうていた。

これら展示や国際会議の開催に際し、自らが感じた課題が、当該プロジェクトのコミュニケーション共生の研究課題としても重要な課題となる。機を逃さずに振り返りの時間を設け、プロジェクトの課題として検討することが期待される。また、それぞれの開催を通じて得られたコミュニケーション共生に効果的なノウハウ等についても、次の機会に活用できるような仕組み作りについても期待したい。

その一環として、令和5年になってからの活動で、定例会において、特別展の内容の今後への展開や個

別の班ごとの研究発表に閉じた議論にならないようプロジェクト協力者を含めた議論を進めている。継続した活動を期待するとともに、各研究班に応じた学会で特別セッション等を開催し、4つの班の議論を展開するなどにより、すべての特性を持つ人たちが参加できる「コミュニケーション共生」と言う研究分野を、既存の研究分野の中で意識してもらう活動なども期待される。